

研究ノート

『レフト・ビハインド』に見られる 反キリスト像についての覚書

加藤 知子

はじめに

『レフト・ビハインド』は、預言家として知られるティム・ラヘイが構想し、ジェリー・ジェンキンスが執筆したもので、キリスト教終末論の一つ、デスペンセーション主義の千年期前再臨説をベースにした小説である。第一巻のストーリーは次のように展開する。

ある日多くの人々が一瞬のうちに消えてしまう。彼らはイエス・キリストの贖罪を信じて生まれ変わったキリスト者と、信仰の責任が求められない子どもや赤ん坊、胎児などだった。様々な憶測が流れた。キリスト教の学びがあるが、生まれ変わったキリスト者ではなかったため取り残されてしまった人々は、聖書で預言されていた携挙けいきよが起こったと悟り、今度こそは信仰に立ち返ろうと決心、伝道活動も開始する。例えば牧師のブルース・バーンズがそうである。主な登場人物であるキャメロン・ウィリアムズ（愛称バック）やレイフォード・スティール、彼の娘のクローイも携挙後の伝道によって信仰に導かれた人々である。

キリスト教信仰を受け入れない人々は、神に代わるリーダーを求め、それに応えるかのように現れたのがルーマニア人のニコライ・カルパチアである。政治的手腕と若さ、斬新な改革案で、あっという間に国際連合の事務総長に就任する。バックたちは、カルパチアが聖書で預言されている反キリストであると断定し、戦いのためにトリビュレーション・フォースを組織する。

『レフト・ビハインド』は、1995年にアメリカで第一巻が発行され、その後、

12巻までが出版された。その他、青少年向けのものやオーディオ・ブックなどの出版物を含めると、シリーズ全体で、6千5百万部を売り上げている¹⁾。小説は2000年に映画化され、アメリカでは劇場公開されているが、日本では未公開である²⁾。

本小論では、『レフト・ビハインド』第一巻を元に、まず、『レフト・ビハインド』に描かれている贖罪観について、ならびに、同著が描写する反キリスト像についてまとめ、次に、アメリカで根強く存在する反ヨーロッパ・反国際社会の感情に言及し、『レフト・ビハインド』が、ディスペンセーション系の流れを汲む福音主義的作品であると同時にアメリカ的小説でもあること、更に、同作品が内包する問題について論じる。

1. 『レフト・ビハインド』に描かれている贖罪観について

宇田進『福音主義キリスト教とは何か』第4章では、宗教改革において「福音主義の問題が大きくクローズアップされるようになった」(同 p.68 l.1)とし、宗教改革の三大原理、すなわち、聖書のみ・信仰義認・聖徒の交わりとしての教会、について詳述している。

このうち、信仰義認は、次のようにまとめられよう。「キリスト教における根本的な問題は罪人はいかにして神に義と認められ、神との正しい関係に入ることができるかということ」であるが(同 p.77 l.11-12)、神に義と認められるのは、人間の行ないや努力によってではなく、「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、働なしに義と認められる」(ローマ人への手紙3章24節)のであり、これを信仰義認と言う。信仰義認は、福音主義的キリスト教徒を自認する者に共有されており、キリスト教福音主義の要と言える³⁾。

宇田進『福音主義キリスト教とは何か』p.51-p.53では、アメリカ福音派の、ディスペンセーション系を含む14のサブカルチュアを挙げている。どのサブ

カルチャーであったとしても、福音派としての共通点があり、信仰義認もその一つである。ディスペンセーション主義者のグループも、福音派の一つとしてリストに挙げられているからには、彼らも信仰義認を堅持しているはずだと考えられる。実際、ディスペンセーション主義をベースにして書かれた『レフト・ビハインド』第1巻邦訳 p.219 l.13- p. 210 l.1 には以下の記述がある。

聖書は、救いはわたしたちの行ないによるのではなく、神の憐れみによる、と言っています。また、わたしたちはキリストにある恵みによって救われる、それは自分を誇らないためだとも言っています。

イエスは、わたしたちの罪を取り去り、わたしたちの代わりに罪の代償を支払ってくださったんです。わたしたちが支払わなくてもいいようにです。罪の代償は死です。イエスはわたしたちを愛してくださり、代わりに死んでくださったのです。自分が罪人であることを認め、十字架での救いの賜物を受け入れますと告白すれば、イエスはわたしたちを救ってくださいます。わたしたちは義とされ、闇から光へ、失われたものから見いだされた者へと変えられるのです。

罪びとである人間は自分では義人にはなれない、義とされるためにはイエス・キリストの十字架による贖罪が必要である、と明記されている点で、『レフト・ビハインド』は、福音主義的信仰に基く作品であると考えてよいだろう。ただし、『レフト・ビハインド』がベースとしているディスペンセーション系の福音主義には、福音主義の要と言われる諸要素以外にも、それをしてディスペンセーション系たらしめる要素（彼らの信じる千年期前再臨説）があり、それは福音主義の他のサブカルチャーと共有されているとは限らないという点をここに記しておきたい。

2. 『レフト・ビハインド』 第一巻に見られる反キリスト像について

本節では、『レフト・ビハインド』では反キリストがどのように描かれているのかを概観する。

携挙後に現れ、あっという間に国連事務総長に選ばれた平和主義を唱える若きニコライ・カルパチアは、粋な井出たちで、素早く人々の心を掴む。バーンズ牧師やボーン・アゲイン・クリスチャンのバックたちは、彼を反キリストであると断定する。

その際の判断材料となるのが、カルパチアの先祖がヨーロッパ、より正確には、ローマの出自であるという点⁴⁾と、彼の掲げる政策である。『レフト・ビハインド』では、携挙に先立ってビデオテープのメッセージを残しておいたニュー・ホープ・ビレッジ教会（バックたちの活動拠点となる教会）のバーノン・ピリングズ牧師がそのメッセージの中で、「ヨーロッパから出現すると思われる人間愛を唱える指導者に、じゅうぶんに警戒してください」（同 p.231 l.17-18）と警告している。すなわち、『レフト・ビハインド』では、ヨーロッパが、反キリストと関わりの深い土地であるという設定になっているのである。

次に、カルパチアが掲げる政策等は『レフト・ビハインド』第1巻では以下のようにになっている。ページ数ならびに行数は、全て『レフト・ビハインド』第1巻邦訳のものである。

- ①軍備撤廃運動を率いる平和主義者である (p.76 l.9 - 10)
- ②調和、兄弟愛、平和、尊重を重視する。意見が異なるからという理由だけで人を退けない (p.274 l.12 - 18)
- ③ひとつの世界共同体を作り上げることを目指している (p.294 l.3)
- ④新しい国連では、十の常任理事国を選ぶべきだとしている (p.294 l.17)
- ⑤世界の通貨を統一しようとしている (p.295 l.16)
- ⑥満場一致で国際連合の事務総長に就任した (p.444 l.7 - 8)

- ⑦国連事務総長に就任後一年以内に国連本部をニュー・バビロンに移すと宣言 (p.445 l.11 - 12)
- ⑧宗教統一の実現を目指している (p.446 l.16 -17)
- ⑨統一言語を目指している (p.447 l.11)
- ⑩彼の政策は世界のリーダーやメディア人らの支持を受けた (p.447 l.12)

これらは、ハル・リンゼイの主張に代表されるアメリカのディスペンセンション主義の中で列挙されている反キリストの性格をなぞったものでもあるが⁵⁾、<平和主義を掲げ、国連事務総長に上り詰めたヨーロッパ出身の政治家>を反キリストとするという設定は、この作品が極めてアメリカ的であることを示す一つの指標であるということをここに指摘しておきたい。それは、この設定が、福音主義者であろうとなかろうと、伝統的にアメリカ人の中に根付いている、反ヨーロッパ・反国際社会の感情とオーバーラップするところがあるからである。次節では、この点についてまとめてみたい。

3. アメリカに根強く存在する反ヨーロッパ・反国際社会の感情について

現在のアメリカ合衆国の土台を作った人々は、もともとヨーロッパからの移民であり、宗教的にせよ、経済的にせよ、いろいろな意味でヨーロッパを見限った経験を持っている。アメリカこそが、新しいイスラエルであるという選民意識（森孝一『宗教から読むアメリカ』p.80 l.7 - 9）、すなわち、「腐敗した『旧世界』であるヨーロッパあるいはイギリスから、大西洋を越えてやってきた人びとによって構成されているアメリカが、現代のモーセであるワシントン将軍によって導かれて、独立を勝ち取り、約束の地であるアメリカ合衆国を打ち建てようとしているのである」（同 p.89 l.8 - 10）という考え方が伝統的にあり、加えて、社会進化思想と相まって、ヨーロッパを敵視、あるいは見下す傾向がアメリカ人の中にないわけではない⁶⁾。

更に、民兵組織ミリシアや全米ライフル協会にみられる、自分の土地・家族・財産は自分で守る、政府は口を出さな、という意識は、反連邦政府感情と結びつき、アメリカ合衆国「南部、中西部を中心として、予想以上に広範に、そして根強く人びとの心をとらえて」おり（同 p.171 l.11 - 13）、それが国際レベルでは、アメリカの土地・国民・財産は、アメリカ人が守る、という態度となって現れ、国連に対する不信へと繋がっているという事実がある（森孝一『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身』 p.56 - p.57）。

国連には、ヨーロッパ諸国が席を連ねており、国連不信を抱くアメリカ合衆国南部・中西部を中心としたアメリカ人たちには、国連自体が、アメリカに対する脅威と映るのだと想像するのは難しくはない。実際、「連邦政府が国連との協調や、世界の諸国との協調を進めようとするのを、アメリカを弱体化するための陰謀である」（森孝一『宗教から読むアメリカ』 p.174 l.3 - 5）と考える団体なども存在し、彼らは国際主義に対しては妄想にも似た拒絶感を持っているという⁷⁾。彼らにとっては、国際レベルでの平和主義は、アメリカ合衆国をあざむくための策謀に映るのだろう。

このような土壌で育った読者たちにとっては、ディスペンセーション主義者であるか否かに拘らず、更に進んで言えば、福音主義者であろうとなかろうと、ヨーロッパ出自の若い政治家が世界制覇を狙って国連事務総長に就任した、彼は反キリストだ、彼は平和主義を標榜するが、それは信じるに値しない、という『レフト・ビハインド』の設定は、極めて現実的なこととして受け止められるのではないかと考えられる。

4. *The Late Great Planet Earth* に見られる反キリスト像について

ディスペンセーション主義者のハル・リンゼイによる *The Late Great Planet Earth* は 1970 年に出版され、現在でも版を重ねており、2 千 5 百万部以上の売り上げを誇っている⁸⁾。アメリカ人の、物の見方に影響を与えていると言っ

てよい著である。リンゼイは、聖書ダニエル書、エゼキエル書、ヨハネによる黙示録などを引用しつつ、千年期前再臨説の視点から、同著が出版された1970年当時の世界情勢を記している。

ダニエル書第7章ではダニエルが幻を見るのだが、その中に四匹の獣が現れる。リンゼイによれば、四匹の獣はそれぞれこの世に起こった大きな帝国、すなわち、第一番目の獣はバビロニア、第二番目の獣はメデアーペルシア、第三番目はマケドニア帝国、第四番目はローマ帝国である。この四番目の獣は、十本の角を持っており、これら「十本の角は、この国から立つ十人の王」である（ダニエル書第7章24節）が、リンゼイはこの十人の王からなる連合が、ヨーロッパ共同体を指しているのではないかと述べている（*The Late Great Planet Earth* p.94 - p.96）。ヨーロッパ共同体は、ローマ帝国の甦りであり、そうなれば、アメリカ合衆国も、もはや西側諸国のリーダーではありえず、甦ったローマ帝国と同盟関係を結ぶだろうという（同 p.161 l.30 - 33）。この十人の王からなる連合の後にまた「もうひとりの王が立つ」とダニエル書第7章24節で続けて述べられているが、リンゼイによれば、これは反キリストであるという。そして、反キリストが、現代（1970年当時）に現れた新たなローマ帝国（すなわちヨーロッパ共同体）の統治者になるという（同 p.185 l.9 - 10）。そして、ローマ帝国が甦ったとなれば、バビロンも復活するに違いなく（同 p.97 l.13 - 14）、世界中の宗教を一つで纏め上げる試みがなされるだろうという（同 p.122 l.17 - 18）。

人々は平和を提供するという者なら誰でも受け入れるようになり（同 p.109 l.3 - 4）、平和を約束する反キリストに与するようになるだろう（同 p.109 l.14 - 15）。しかし、テサロニケ人への第一の手紙第5章3節（「人々が『平和だ。安全だ。』と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。」）にあるように、反キリストの言う平和を信じていると、それは結局滅びに至るのである、とリンゼイは警告している。

The Late Great Planet Earth と『レフト・ビハインド』を比較すると、後者が、反キリストのプロフィールに関して、忠実に前者をなぞっているのがわかる。両者共、ディスペンセーション主義的であると同時に、アメリカ人の心の奥底に元来潜む、ヨーロッパ・国際社会に対する猜疑心を沸々とさせるという点で、極めてアメリカナイズされた著作群であるということができよう。言い換えれば、両著作共、＜アメリカ的なもの＞が随所に混入し、ディスペンセーション系千年期前再臨説とアマルガムを成しているということである。

5. ニューエイジ・ムーブメントを反キリスト的だとする立場について

ニューエイジ・ムーブメントとは、「変動と激動の後に訪れるであろう新時代には、全人類、全動物、植物、生命をも含むたった一つの平和な地球家庭がこの地上に現出する」が、「すべての枠組み、宗教、人種、国家、見解、主張、立場、地位、職種、性別、思想を超えて、全体真理に基く理想世界を相共に築き上げて」いこう⁹⁾ というような基本理念を持つ活動のことであり、アメリカがその本場である。

水草修治『ニューエイジの罫』によると、ニューエイジは単なるムーブメントであるという主張、ニューエイジには世界的な策謀があるという主張、そして、その中間の主張があるという。同著 p.32 l.1 - p.34 l.2 では、テクセ・マルスが、ニューエイジの策謀として列挙しているものが合計 13 挙げられている。その中のうち、五つを下に記す¹⁰⁾。

- ①計画の中心は、一つの世界、すなわちニューエイジ宗教と一つの政治的社会的秩序を造ることである。
- ②ニューエイジ世界宗教は密儀、オカルトなどを含む古代バビロンの偶像礼拝的宗教の復興による。
- ③この計画はニューエイジのメシア、つまり 666 の番号を持つアンチ・キ

リストが、統一されたニューエイジ世界宗教を指導し、新しい世界秩序を総覧するために来る時に実現する。

- ④もろもろの霊たちが人間がニューエイジを造りだすのを助け、アンチ・キリスト、つまりニューエイジにおける神人への道備えをする。彼は偉大な世界の師と呼ばれる。
- ⑤「世界平和」、「愛」、「統一」がニューエイジ世界宗教の標語である。

テクセ・マルスがニューエイジ・ムーブメントを反キリスト的だとする根拠は、アメリカのディスペンセーション主義に基づいて執筆された『レフト・ビハインド』で、カルパチアが反キリストだと断定される理由とパラレルであることに気付かされる。更に、世界を統一するという<策謀>は、もともと反ヨーロッパ・反国際主義が強いアメリカであればこそ、なおさら危機感を煽るものであると言えるだろう¹¹⁾。アメリカでは、福音主義者によるニューエイジ・ムーブメント批判が強くなるが¹²⁾、その背後には、アメリカ国民の根強い反欧・反国連感情や、ディスペンセーション系信仰に基づく諸著作が存在するのだと言えることができるかもしれない。

6. 『レフト・ビハインド』が内包する問題について

聖書を神の言葉であると信じる福音主義者ならば、この世の終わりが訪れ、イエス・キリストが再臨すると信じることは自然なことだろう。よって、聖書の、終末に関わる箇所を丹念に吟味することは重要だと言える。しかしながら、聖書においては、イエス・キリスト自身が、終末がいつなのかは、父なる神を除いて誰にもわからない、と明言している点が重要である。マタイによる福音書第24章35 - 36節には次のようにある。

この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びること

がありません。ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます。

ディスペンセーション主義が陥りやすいのは、終末論を重要視するがゆえに、終末へのカウントダウンを実際に行う、あるいは、行っているかのような印象を与えるという点であると思われる。

水草修治『ニューエイジの罫』は、キリスト者は、ニューエイジ・ムーブメントに警戒するように強く呼びかけている。しかしながら筆者の水草自身は、対ニューエイジ批判の言うところの反キリストが、聖書の述べている反キリストだと断定することもそうでないと断言することも、「聖書的にいってふさわしくないであろう」（同 p.35 l.10）と明言している。ハル・リンゼイでさえ、We must not indulge in speculation about whether any of the current world figures is the Antichrist（我々は現在の国際的人物の誰かが反キリストなのだろうかと思いを巡らすことに耽溺してはならない）（*The Late Great Planet Earth* p.113 l.22 - 23 日本語訳は本論文筆者拙訳）と述べている。

一方、『レフト・ビハインド』では、国際連合の事務総長に就任したニコライ・カルパチアを反キリストとするという明確な設定のもとにストーリーが進む。『レフト・ビハインド』はフィクションであるが、国際連合は実在の組織であり、事務総長も、実存のポストである。フィクションないしはエンターテインメントであるからということで、反キリストが国連事務総長であると断言し、キリスト再臨までのカウントダウンを開始してみせることが聖書に叶ったことなのだろうか。

『ハリー・ポッター』シリーズが魔術の世界に子供たちを誘っているとして、福音主義者たちの多くは強い抗議に出た。『ハリー・ポッター』シリーズを擁護する側は、読者は、現実とフィクションの世界を区別するため、心配ないと述べた。しかし、同シリーズ反対派は、フィクションの世界が現実に影響を及ぼ

さないという絶対の保証はない、と主張した。『レフト・ビハインド』はフィクションである。しかし、フィクションが現実社会に影響を及ぼし、読者の実際の世界観を変えたり、あるいは、強化したりする可能性はないのだろうか。6千5百万部以上の売り上げを誇る『レフト・ビハインド』シリーズの読者は膨大な数に上る。その全員が、フィクションと現実を明確に分けて作品を読み進めるという保証はあるのだろうか。既に作品の中に、純粋に神学的視点とは異なる〈アメリカ的なもの〉が散りばめられている同シリーズの場合はなおさら、そのような現実と想像の混同という事態を招いてしまう可能性が高いのではないだろうか。現実との境界がわからなくなった読者が出現した場合、彼らはアメリカ合衆国政府にどのような国際政策を望むようになるのだろうか。

いずれにせよ、ミリオンセラーの粋をはるかに超える『レフト・ビハインド』シリーズは、ディスペンセーション系の終末論とはどのようなものなのかを知るだけでなく、極めてアメリカ的な発想を知る上でも有益な材料となるだろう。

注

- 1) 『レフト・ビハインド』公式サイト <http://www.leftbehind.com/> による (2007年9月10日現在)
- 2) 『レフト・ビハインド』の日本語訳はいのちのことば社フォレストブックスから出版されており、DVDも日本語版のものが三作目まで作成され販売されている。
- 3) 宇田進『福音主義キリスト教とは何か』p.167 l.1 - p.168 l.5 には、ブローシュによる、福音主義の「品質証明」が列挙されている。福音主義者を自認する者であれば、自分が属するサブカルチャーが何であれ、これらを共有しているはずである、というわけである。
 - 一 創造者・主権者である神 (創世一、十七1、黙示録二一22)
 - 二 聖書の靈感と神的権威 (II テモテ三 16 17)
 - 三 人間の全的墮落性と罪性 (詩篇五一5、エレミヤ十七9)
 - 四 キリストの身代わりの贖罪 (エペソ一7、ヘブル九22)

- 五 神の恩恵のみによる救い (テトス三5)
- 六 信仰義認 (ローマー 16、一〇 10)
- 七 神のみことばの説教を第一とし中心とする (ローマー〇 17、I コリント一 21)
- 八 聖霊によるきよい生活と弟子としての犠牲的生活 (ヘブル一 14)
- 九 教会の世界大宣教の使命 (マタイ二八 19 20、マルコー六 15、使徒一 8)
- 十 キリストの再臨 (ヘブル九 28)

本論文第2節に引用した『レフト・ビハインド』第1巻邦訳 p.219 l.13 - p. 210 l.4 の箇所では、信仰義認のほか、上記三、四、五が明言されており、『レフト・ビハインド』全体では、上記一から十までが漏れなく示されている。

- 4) 『レフト・ビハインド』第1巻 p. 471 l.18 には、カルパチアは「クルジュで生まれ、祖先はさかのぼってローマ人だと考えられ」ているという設定になっている。
- 5) ディスペンセーション主義者のハル・リンゼイによる *The Late Great Planet Earth* を参照。同著については、本論第4節でも触れる。ただし、*The Late Great Planet Earth* では、国連事務総長が反キリストであるという主張はなされていない。
- 6) これは、アメリカでは、「文明は進化するものであり、進化の最先端に位置しているのが『アングロ・サクソン文明』である。『アングロ・サクソン文明』の担い手は、これまではイギリスであったが、いまやアメリカが『アングロ・サクソン文明』の先駆者であり、それを世界に伝えていく『使命』を与えられている。すなわち、世界をアメリカ文明に同化することが進化であり、それが文明化なのだ」とする考え方である (森孝一『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身』 p.78 l.2 - 6))。
- 7) 『宗教から読むアメリカ』 p. 174 l.10 - p.175 l.3 の<陰謀>例を参照。同著では、このような策謀があると主張する団体として、<アéria国家>や<愛国主義者>などを挙げている。
- 8) セバスチャン・ファト著 *Militants de la Bible aux États-Unis* p.172 l.30 - P173 l.2 による。
- 9) 水草修治『ニューエイジの罟』 p.14 l.7 - 10 に引用された、国際ニューエイジ協会 (同著出版当時。1997年より浅野総合研究所と改名) 浅野信代表の言葉。

10) その他の策謀は以下のとおり。

- ⑥ニューエイジの教えは地球上の社会のあらゆる分野で教えられ、宣伝されなければならない。
- ⑦ニューエイジの指導者と信者たちは、イエスは神でもなければキリストでもないという背教的教えを広める。
- ⑧キリスト教とほかのすべての宗教はニューエイジ世界宗教の一部とみなされる。
- ⑨キリスト教の原理は信用されず、放棄される。
- ⑩子どもたちは霊的に誘惑され、教え込まれて、学校の教室はニューエイジのドグマを教える。
- ⑪人間は神であるということ信じないように、世界中で人間賛美がされる。
- ⑫科学とニューエイジ世界宗教は一つになる。
- ⑬この計画に抵抗するクリスチャンはさばかれ、もし必要とあれば、クリスチャンたちは除かれ、世界は「粛清」される。

11) ただし、ダニエル書第7章23節によれば、ダニエルの幻に出てきた四番目の獣は、「全土を食い尽くし」とあり、聖書そのものに、世の終わりには世界制覇を試みる者が現れるという記述があるゆえに、反ヨーロッパ・反国際主義ではなくとも（更に言えば、アメリカ人であろうとなかろうと）世界統一の策謀と聞いて警戒心を持つキリスト者はいると考えられる。

12) 『ニューエイジの罠』も、福音主義キリスト教系のCLC出版より出ている。

参考文献

Fath, Sebastien(2004) *Militants de la Bible aux États-Unis.Évangéliques et fondamentalistes du Sud*. Paris:Autrement.

加藤知子(2005)『『ハリー・ポッター』と『ロード・オブ・ザ・リング』をめぐる、キリスト教徒間の議論についての覚書』『星城大学人文研究論叢 第1号』

- LaHaye, T and J.B. Jenkins (1995) *Left Behind*. Tyndale House Publishers, Inc.[ティム・ラヘイ、ジェリー・ジェンキンス『レフト・ビハインド』上野五男訳、いのちのことば社フォレストブックス、2002年]
- Lindsey, Hal (1970) *The Late Great Planet Earth*. Michigan: Zondervan.
- 水草修治 (1994) 『ニューエイジの罫』 CLC 出版。
- 森孝一 (1996) 『宗教から読む「アメリカ」』 講談社選書メチエ。
- 森孝一 (2003) 『「ジョージ・ブッシュ」のアタマの中身』 講談社文庫。
- 日本聖書刊行会 (1970) 『聖書』 新改訳。
- 宇田進 (1984) 『福音主義キリスト教とは何か』 いのちのことば社。